

1. 島根の路傍の石-道標石-

技術士として、島根の豊かな自然や多様な文化などの、地域資源を活かした地域振興ができないか日々考えている。それぞれの地域がもつ潜在的な力を発揮し、持続的に発展するための課題を解決するために、自らの知識や技術を駆使し、社会に貢献できる技術士でありたいと思っている。

島根県内を自動車で行くと、所々で様々な石像に出会う。古い街道だけでなく、改良された県道や国道の脇にも立っている。一畑薬師と刻まれた石柱や灯籠、丸の中に金と書いてある灯籠、そして路傍にたたずむ石地蔵などである。

これらの石像は、寺院や神社などの宗教施設とは無関係な道路脇に設置されている。連続して建てられているものもあるし、交差点や峠に立っているときもある。設置された当時は、一定の距離ごとに配置されていたのではないかと思います。これらの石像は、ある目的地を目指した道標と考えられることから、島根のマイルストーンではないかと思っています。

島根県内に点在する石像については、その位置や歴史について調査を始めたばかりである。その配置間隔や設置場所の意味については、調査不足ではあるが、奥出雲で際だったものがあつたので、紹介したい。



松江市内の一里地蔵

2. マイルストーン

マイルストーンとは、道路や鉄道の距離標識である。広辞苑には、1マイル(約1.6キロメートル)ごとに設置する里標石とある。Wikipediaによると、ローマ帝国が紀元前120年頃から主要な街道に、1ローママイル(1000歩)ごとに設置したのが始まりとされ、イタリアのアッピア街道には現在も残っているという。

現代でも、主要な国道や鉄道には、里程標が設置され、マイルポスト、キロポストと言われている。一般的なマイルポストやキロポストは、起点から終点に向かって設置させるものであり、道路や鉄道管理者が設置している。

日本のキロポストは、国道については日本橋を起点に、鉄道は東京駅を起点とし、そこをゼロポストとして、終点に向けて、1キロメートルごとに設置されている。

そのほかの道標としては、目的地までの案内を示すものがある。例えば、出雲大社への標識は交差点ごとに整備されており、方向や距離が示されている。大山や三瓶山に登ると、山頂までの方向と距離が示された道標が整備されており、登山に大いに役立っている。



伊志見一里

3. 島根の一里塚

日本最初のキロポストは、一里塚である。主要な道路の傍らに1里(約3.9キロメートル)ごとに塚を築き、マツやエノキの木を植え、旅行者の里程を示す目印とした。ヨーロッ

パのように石柱を配置するのではなく、塚を築いたのが日本らしい。

現在、文化財保護法の史跡名勝に指定されている一里塚は、全国で17塚ある。そのうち島根県内では3塚が指定されている。旧山陰道沿線に、安来一里塚(安来市)、伊志見(いじみ)一里塚(松江市宍道町)、出西・伊波野(いわの)一里塚(出雲市斐川町)である。かつては、大きな松がランドマークになっていた。現在はマツは枯れ、土饅頭が残っているだけである。



伊波野一里塚

日本の一里塚は、いつ頃できたのであろうか。参勤交代が始まった江戸時代に整備されたというのが、通説である。

しかし、一休禅師の作とも言われる和歌に

門松は 冥土の旅の一里塚 目出度くもあり 目出度くもなし

とあるので、一休禅師が生きた室町中期には、既に一里塚はあったと思われる。では、島根の一里塚はいつできたのであろうか。一里塚は、土で造られた塚であり石像ではないが、島根には一里地藏や一里マツなどと言われるものも残っており、路傍の石像と併せて調べを続けていこうと思う。

4. 奥出雲のマイルストーン

今回は、奥出雲の路傍で出会うマイルストーンを紹介する。

〔一畑薬師と金比羅宮〕

下の3枚の写真は、一畑薬師の石柱である。峠や橋のたもと、交差点などに配置されている。かつては、各地で一畑講が組織され、一畑薬師にお参りしたという。その時の道標の名残であろう。



吉田町



大東町



掛合町

丸の中に金と書いてある灯籠も県道や市道の脇で見かける。右の写真灯籠が、神社や寺の境内ではなく、ポツンと一基、路傍に立っている。この丸金の印は、金比羅宮を示すと思われる。奥出雲でとれた鉄を輸送する船を田部家が持っていたという記録もある。海の安全を守るための神である金比羅神社は、島根県内があることから、四国のそれではなく、県内の金比羅さんとの関係が深いと考えている。



〔雲南地藏街道 地藏のマイルストーン〕

一般県道掛合大東線は、雲南市掛合町の国道54号から大東町東阿用の県道玉湯吾妻山線までで、雲南市を東西に最短で結ぶ道路である。この道の脇には、次々と小さな石地藏が立っている。注意



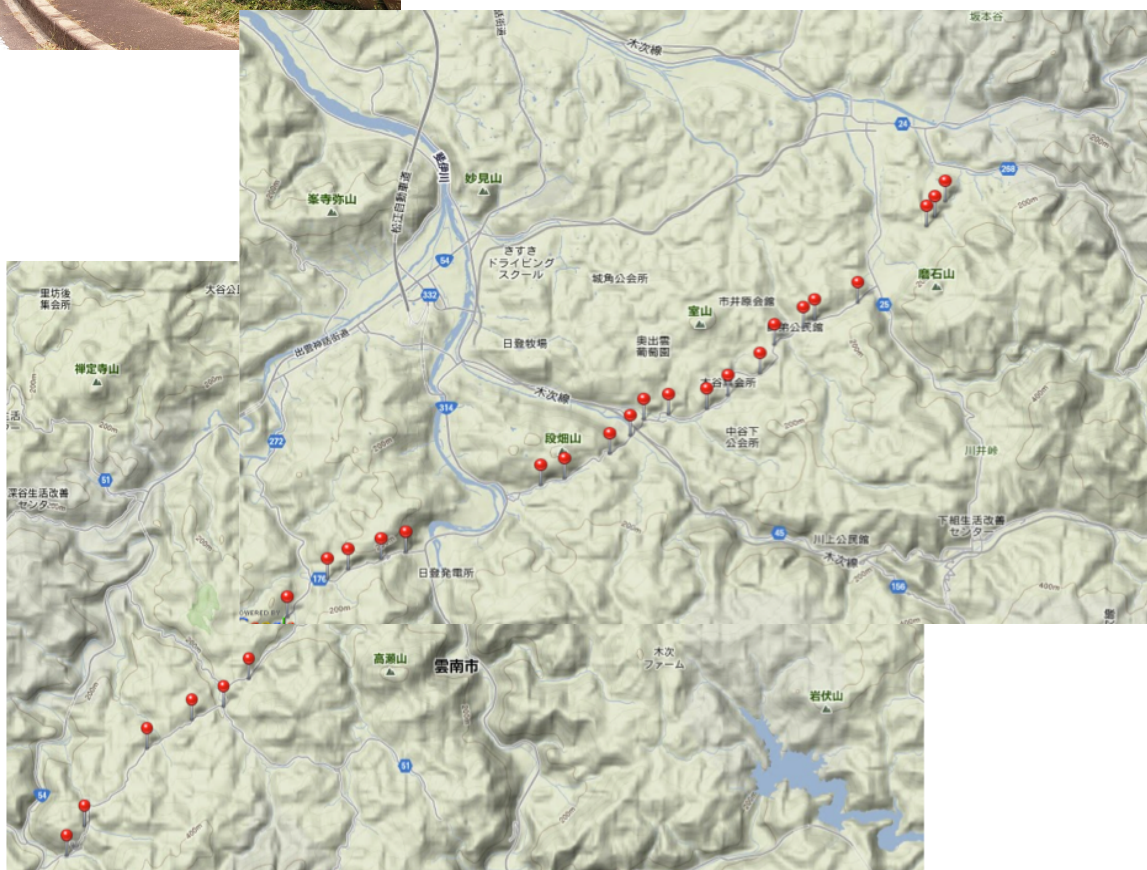
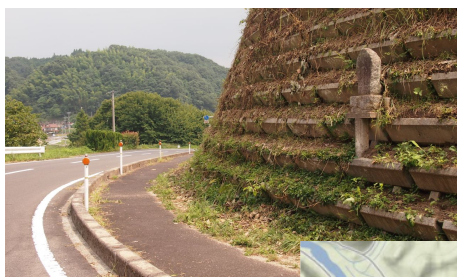
していないと、草にもれて見えない時も多い。高さは50センチメートル程度のものがほとんどであるが、80センチメートルくらいの大きなものもある。まだ全部を見つけたわけではないが、現在までに100基以上写真に納めた。

地蔵の位置を地図にプロットしてみると、地図のとおりとなる。地蔵は、県道掛合大東線の起点から終点まで連続して配置されている。

この地蔵を地元の人は、「一町地蔵」として、大切にしている。県道の道路改良が行われるときには、旧道から移設し、地域の宝として受け継がれている。

地蔵の名の由来を尋ねると、1町ごとに配置され、地蔵には順に番号が振ってあると説明を受けた。まさに島根のマイルストーンである。

1町とは、約105メートルのことである。現地で測ってみると、100メートル間隔で設置されているところもあるが、必ずしもそうではない。その用を失ってしまって、何十年も経過し、ばらばらになっているのではないかな。



〔一町地蔵は遍路道の道標〕

この道路沿線には、数々の寺があり、観音参拝の出雲巡礼の道であった。昭和40年頃までは、巡礼者の木賃宿もあったという。宿帳や木賃宿の看板も残っているらしい。



「木次町の言い伝え」という小冊子に、左の絵図と共に、この一町地蔵について書かれている。

一町地蔵は、道しるべ地蔵と絵図にある。1町ごとに据えられ、木次町西日登の万福寺から大東町西阿用の蓮華寺までの道標になったという。

春の農作業の始まる前、サクラや菜の花が咲く頃に巡礼者が最も多く、1日200人を超えることもあったと書かれている。日程も、約1週間の道中となったようである。その時は、今の四国遍路道のようにこの街道も賑わったに違いない。

著者の板垣さんは、この巡礼の旅は、宗教的な意味合いだけでなく、レクリエーションや視察の旅でもあつと述べている。信仰の名の元、農民の慰安の旅であり、地域

の事情視察、特に農事の研修の場でもあったという。

巡礼の若者は、グループ内や他のグループ間で交流が始まり、恋が芽生えて、めでたくゴールインする若者もあり、観音様の仏縁だと喜んだだとも言われる、縁結びの道でもあったらしい。

5. シーニックバイウェイからシーニックロングウオークへ

シーニックバイウェイ（日本風景街道）という道路を利用した観光交流開発が進められている。島根県でも「神仏の通ひ道」という標識に出会う。出雲大社や一畑楽師など20社寺を巡るルートとして整備されているものである。シーニックバイウェイは、自動車で移動し、景観や文化を楽しみ、地域を振興するためのツールとして、整備が進められているのである。

一方、高齢化社会を迎えた我が国では、健康や安全でおいしいものを食べたいというニーズが高まっている。四国八十八カ所を歩いて廻る人も増えているという。この歩く遍路は、昔と違い、一気に八十八カ所を遍路するのではない。区間を定めて歩くのが一般的である。今回の出発点までは、鉄道やバスなどを利用し、目的地まで歩き、自宅に帰るのである。

雲南地蔵街道は、四国の八十八カ所遍路道より圧倒的に短い。四季折々の景観を楽しみながら歩く最適な散歩道である。雲南市は市民バスが充実していることでも知られている。街道の近くの公民館などの公共駐車場までは自家用車で行き、行き、街道沿いの市民バスのバス停までロングウオークを楽しみ、市民バスを利用して、駐車場まで帰る。この地域には、温泉も多く、道の駅なども充実している。スローフードのレストランも多い。

雲南地蔵街道をシーニックロングウオーク〔島根風景散歩道〕として位置づけ、市民バスの時刻に合わせたコース設定していきたいと思っている。地図には、地蔵の配置をプロットし、それを見つかけながら、自分の現在位置を知ることを楽しむなんて企画はどうだろうか。経営の厳しい地域の市民バスの利用促進にもつなげられたと思っている。

以上